

烏森トレッキング回想記

第七回

日時：'01. 5. 19 (土) ~ 5. 20 (日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～(森林浴コース)～氷川キャンプ場～奥多摩駅～桃ヶ沢～おくたまむかしみち～境橋～奥多摩駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊／登奈利荘

2日目 長尾平～ロック・ガーデン～長尾平～御岳平～御岳駅

メンバー：齋木、米本、山田、吉川、森、磯崎

小林氏初参加の予定が、急な会議で欠席となり、残念至極。

それでも、これまでの最多人数、6名の参加を得、**ゴマ塩混じりの黒烏が奥多摩路に群をなす。**

今回も快晴下のトレッキング。

自他共認める“晴れ男”、森氏の妖術に、ますます磨きが掛かり、風薫る五月の朝、登山客で溢れる奥多摩駅から、近くの溪流沿いの道、「ふれあいの森林浴コース」を歩く。

道は、柔らかで、透けそうな緑に包まれ空気は清冽、水光る川面は眩しく、しなやかに伸びる小枝の若葉が眼に優しい。

二つ目の吊り橋を渡り、氷川キャンプ場に到着。

散々騒がした野外炊さんのメニューは、予定通り、手間の掛からぬ、「そーめん流し」。

とは言え、各家庭の習いが主張され、料理進行にはそれなりの紆余曲折有り。

一応の合格点に達したのか、多めの麺も無事完売。(M氏のぼやき、“行き掛かり上、無理して食ったもんなあ！”)

ただ工夫の「ジャガ芋の蒸かし」と、「ポップ・コーン」は余分であったかも。

今回は、“おくたまむかしみち”のウォーキング。

かつて、甲州とを結ぶ経済要路の一部であった“むかしみち”は、奥多摩／氷川(奥多摩駅付近)から奥多摩湖／水根(小河内ダム近辺)迄の約9kmを指し、旧青梅街道の一部を含む。

現在の新青梅街道とも並行し、途中、どこからでもバス停に出入りできる利便性もあり、ウォーキング雑誌では、しばしば紹介される人気のコース。

春の息吹を胸一杯吸おうと、今回はその中間、桃ヶ沢～境橋間の約2.6kmを歩くことにし、桃ヶ沢バス停で下車。

新青梅街道を少し下り、分岐する旧青梅街道に入ると、そこはすでに、“むかしみち”。
奥多摩／氷川方面へ戻るかたちで、歩きをスタート。

旧街道の面影が残る“みち”は、ほぼフラットで、緑に包まれた静寂の道。

歩く左手／北側上部を新青梅街道が走り、右手／南側崖下は、「御前山」、「惣岳^{そうがく}」から流れ込む「惣岳溪谷」が沿う。

溪谷を覆う樹々は、なお若葉の育みながら、汗ばむ陽気に氷水が旨い。**(詳細語らずが良も、奥多摩駅前スーパー購入の「氷」が、キャンプ場^{キャンプ}に続きここでも大活躍！)**

途中、溪谷に懸かる「道所吊橋^{どうところ}」、「しだらく吊橋」から、「惣岳溪谷」を見下ろし、谷の深さと、水の流れの急を知る。

橋の袂に留まり、盛んに人数勘定する御仁居り、どうかしたかと訊くと、橋梁に取り付けられた看板、「同時渡橋 5名迄」の注意書きを指さす。

“みち”の道中、そこかしこに、“むかし”を語る史跡案内板が立ち、都度、立ち止まっては読み上げて、往時の生活や神々への信仰振りを窺う。

しかし何故か、荷駄積む馬の歩む様はイメージできず、悠久の時の流れも感じられず、“「みち」を切り取り歩き”した所為かと気になる。

道端の民家に人影は見られず、意外かな、奥多摩／氷川から上るハイカーとの出会いも無く、時折響き渡るは我らの会話のみ。

コースの最後は、巨樹、「いろは楓」。

季節は外れるものの、見事な枝振りを紹介し、秋の“みち”を誘う。

坂を下り、橋上のバス停、「境橋」に到着。

奥多摩湖側のトンネル上部草むらに、猪突猛進する動物を見つけ、“牡丹鍋には、まだ早い”、とみんなで指さし大笑い。

(後に、あれは「カモシカ」と笑う人が居るが、いづれにしても、「猪」、「鹿」、「蝶」で一役なり！)

満員バスに乗り込み、御岳の宿へと奥多摩駅へ。

宿は久しぶりの「登奈利荘」、事前の打診で、メンバーからの根強い支持を知る。

料理は相変わらず秀逸で、有償か無償かで悩ませるカラオケをサービスし、部屋で持ち込み酒を飲む最中、いきなり襖を開けて、素知らぬ顔で果物差し入れする女将の如才なさは健在なり。

二日目はロック・ガーデンを歩いた後、長尾平に戻って昼食。

端の木テーブル脇に、青々と伸びる一本の若木を見つけ、溢れる生命力を愛でんと、座るつもりで荷降ろしするや、“**そこは駄目！**”、と大喝受けて慌てて避難。

もちろん、声の主は山田氏で、その木は、なんと、「漆の木」。それにつけても、山田氏の博識振りには改めて感服し、大拍手！

晴天下、陽光を燦々と浴びながら、「おにぎり」と「おでん」をメニューに楽しい昼食。

食事の話題は、しばし、“漆談議”が続き、後に座る若いカップルを注意したり、からかったりと大笑い。

今回、「登奈利荘」から大鍋借用と言う妙手を見つけ、「おでん」を加熱調理。

しかし、空腹のメンバーには加熱が待てず、折角の工夫も伝わらずは、何とも遺憾で拍子抜け。

食後、木陰に移り大休止。

草枕で横になる人、肺空気を入れ替える人、会話を楽しむ人、写真を撮る人、のんびりとした時の流れに身を任す。

下山途中、鍋の返却に登奈利荘に立ち寄るや、女将の、茶の勧めに、ついついメンバー座敷に上がり込み、**靴紐を締める頃には手に土産物、女将、鮮やかなり！**